

仙石山仏教学論集
第12号（令和3年）

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. XII, 2021

Yuktiṣaṣṭikākārikā の帰敬偈について
—— Candrakīrti の注釈を中心に ——

劉 暢

Yuktiṣaṣṭikākārikā の帰敬偈について — Candrakīrti の注釈を中心に —

劉 暢

要 旨

本稿は、『根本中論』(MMK)の帰敬偈に対するチャンドラキールティの注釈と比較しながら、『六十頌如理論』(YS)の帰敬偈に対する彼の注釈内容に分析を加える。

チャンドラキールティはYS、『空七十論』、『廻諍論』及びMMKの関係について、いずれも第1偈の内容に関連づけて解説している。チャンドラキールティによれば、YSとMMKは縁起の考察から始める点で共通するので、両論は独自の著作目的をもつ独立した論書として意味づけられる。また彼はYSが説く縁起の意味はMMKと異なると述べている。

すなわちYSは、縁起の実践上の意義と働きを理解するナーガールジュナによって、仏の教説を集約した正理(*yukti)によって、有見を排除するために、アビダルマに従う人々に対して著された、とチャンドラキールティは理解している。これに対してMMKは、般若波羅蜜多の方途(nīti)を理解するナーガールジュナが戲論の寂滅のために著したという。また、YSは生滅・有無という分別を離れ、対象化されることがない(nirālamba)縁起を説くが、MMKは八不によって限定される縁起を説くという。

さらにチャンドラキールティはナーガールジュナによる仏に対する四つの礼拝理由を順次に説明する。チャンドラキールティにとって、縁起は相互に依存すること、さらにまた本質をもって生じることと滅することがないことを意味するという。このような縁起説は、最高の賢者(munīndra)にして最高の教師(*anuttaraśāstr)である仏によってのみ説かれる根本教説であると意味づける。チャンドラキールティはまた、まさにこれによって、仏が世間の人々をよく利益するとともに、ナーガールジュナ自身もまた自らの心に縁起に関する確実な理解を得たという。

0. はじめに

ナーガールジュナ (Nāgārjuna, 150-250 頃) が著した『根本中論』 (*Mūlamadhyamakakārikā*, 以下 MMK) 冒頭の帰敬偈 (「八不」偈、マンガラ・シュローカ) は、第 24 章のいわゆる「三諦偈」 (MMK 24.18) と共に、中観思想における代表的な縁起に対する定義文であると言っても過言ではない。桂・五島[2016]が指摘するように、この帰敬偈は MMK の主要なテーマを提示し、同論創作の目的をも示している¹。チャンドラキールティ (Candrakīrti, 600-650 頃) は、MMK に対する注釈である『プラサンナパダー』 (*Prasannapadā*, 以下 PsP) の中で、ナーガールジュナの帰敬偈によって、MMK の主題 (abhidheya) と目的 (prayojana) を説明する²。さらにまた、MMK の関係 (sambandha) を説明する際には、『入中論』 (*Madhyamakāvātāra*, 以下 MA) の第 1 章・第 1 偈において確定された菩薩になる三つの原因 (大悲心と無二智と菩提心) によって、ナーガールジュナが般若波羅蜜多の正しい方途を理解したこと (viditāviparītaprajñāpāramitānī) を強調する³。

¹ 彼の意図は次の四点にまとめることができる。(1) 縁起は仏が説かれたものである。(2) 縁起は不滅・不生等の「八不」で説明されている。(3) 縁起は戲論の寂滅、吉祥にほかならない (=縁起、空性の目的)。(4) このような縁起を説く仏は説法者中の最高の説法者である。桂・五島[2016: 9, 174-176]を参照。また、渡辺[2020: 130-127]は、MMK の帰敬偈は「大品系般若から借用したものであったのだろう」という。帰敬偈の成立史に関する考察は三枝[1982: 67-80]を参照。

² MMK の主題 (abhidheya) とは「不滅等 (八不) の限定によって限定された縁起」 (anirodhādyasṭaviśeṣaṇaviśiṣṭaḥ pratītyasamutpādaḥ) であり、目的 (prayojana) とは「『すべての戲論が寂靜し、至福なる』を特徴とする涅槃」 (sarvaprapañcopaśamaśivalakṣaṇaṃ nirvāṇaṃ) である。MacDonald[2015: Vol. I. 117-119, §3]を参照。

³ MA I.1: munīndrajāḥ śrāvakamadhyabuddhāḥ sambodhisattvaprabhāvāś ca buddhāḥ | kāruṇyacetō 'dvayadhīś ca hetuḥ sambodhicittaṃ ca jinātmajānām || 「諸々の声聞と中佛 (=独覚) は最高の賢者から生じる。また、諸仏は菩薩から生じる。悲心と無二慧と菩提心は勝者の子 (=菩薩) の原因である。」 tatra na svato nāpi parato na dvābhyāṃ ityādi vakṣyamāṇaṃ śāstram | tasya kāni sambandhābhidheya prayojanānīti

一方また、同様にナーガールジュナの作品とされる、論の冒頭で帰敬偈を置く『六十頌如理論』(Yuktiṣaṣṭikākārikā、以下 YS) には、チャンドラキールティの『六十頌如理論注』(Yuktiṣaṣṭikāvṛtti、以下 YSV) がある⁴。チャンドラキールティは YS の帰敬偈を注釈する中で、ナーガールジュナが YS において縁起を説明する動機、MMK と YS という二つの中観論書の冒頭で帰敬偈が置かれる理由、帰敬偈に対する四つの解釈等を説明する。これらに関しては、北畠[1958]、瓜生津[1985]⁵、Scherrer-Schaub[1991]⁶、李・葉[2014]⁷、津田[2019]⁸等の先行研究にも部分的に言及されているが、不十分であると思われる。本論の考察は、YS の著者問題を検討するための一助となるであろう。

praśne Madhyamakāvātārahivhitavidhinādvayajñānālaṅkṛtaṃ mahākaruṇopāyapurāḥsaram prathamacittotpādaṃ tathāgatajñānotpattihetum ādiṃ kṛtvā yāvad ācāryanāgājunasya viditāviparītaprajñāpāramitānīteḥ karuṇayā parāvabodhārthaṃ śāstrapraṇayanam ity eṣa tāvac chāstrasya sambandhaḥ | 「さてここで、「自から[生じたもの]でもなく、他から[生じたもの]でもなく、両者からでもない」云々という論が説かれるであろう。それ(論)の関係・主題・目的は何かと問うならば、MA において確定された方法によって、無二智によって飾られ、大悲という手段に先導され、如来智の生じる原因である第一の発心を初めになして、乃至、般若波羅蜜多の正しい方途を理解されたナーガールジュナ師が悲によって他を覚らせるために、論を著わされた、というこのことがまず論の関係である。」 Cf. MacDonald[2015: Vol. I. 116-119, §2-3, Vol. II. 10-17, 351-355, 357-358], 瓜生津・中沢[2012b: 29.12-21], Hahn[1982: 122-123], 瓜生津・中沢[2012a: 82], 岸根[2001: 216-222], Yonezawa[2019: 192 §2]。

⁴ Lindtner[1982: 100.2-5]、津田[2019: 45, 100 (n. 167)]が指摘するように、YS はナーガールジュナの著作の中で最も頻繁に引用される論書の一つであるという。また、YSV はチャンドラキールティの著作の中で前伝期 (sngadar) にチベット語に翻訳された唯一の作品である点も注目される。近年、李・葉[2014]によって回収されたサンスクリット語の偈文と注釈の断片という貴重な資料も公にされている。

⁵ 帰敬偈に対する四つの解釈について、瓜生津[1985: 92-94]は三つの解釈と理解する。

⁶ Scherrer-Schaub[1991: 101-119]を参照。

⁷ 李・葉[2014: 2-3]は四つの解釈について、礼拝の因、縁起を説く人、仏が縁起を説く原因、YS の中で仏の言葉と考える。

⁸ 津田[2019: 45]を参照。

帰敬偈が置かれる理由に関して、チャンドラキールティは、YS が MMK と同様に帰敬偈をもつのは、同論が MMK から展開されたものではなく、縁起を論じる独立した論書であるからと述べている。それでは、インド仏教史において YS に初めて言及したとされるチャンドラキールティ⁹は、YS と MMK が帰敬偈をもつことの意味を説明するとき、YS と MMK 両論の趣意や創作目的の相異をも意識していたであろうか。しかしながら、YS の帰敬偈とそれに対するチャンドラキールティの注釈については、本格的な考察がなされていなかった。本稿では、YS と MMK との帰敬偈に対する両注釈を比較考察しながら、YS の中観論書としての位置づけに着目しつつ、YSV に見る YS 帰敬偈に対する注釈内容を分析し、考察を加えたい。

1. YS に帰敬偈が存在することに関する三つのポイント

まず、チャンドラキールティが説く、帰敬偈が存在する理由を考察したい。YS が MMK から展開した論著ではないことに関して、チャンドラキールティは帰敬偈があるかどうかを一つの基準とするが、厳密に言えば、彼が挙げる理由には、(1) 論の内容から見れば、YS は MMK の文脈を継承してはいない、(2) 論の構成に関して、MMK の一つの問題(あるいは一つの偈)をめぐる論難と回答という形式をとってはいない、(3) この論書は MMK と同様に主に縁起の考察から始める、という三つのポイントを指摘している。この点を YSV は次のように説明する。

ci'i phyir sTong pa nyid bdun cu pa dang // rTsod pa bzlog pa las slob dpon gyis
bstod pa ma brjod la¹⁰ dBu ma 'di las brjod ce na /

⁹ チャンドラキールティがインド仏教における YS をはじめに言及するとされるが、YS の帰敬偈は『無畏論』(*Akuṭobhayā*) の冒頭にも見られ、MMK の帰敬偈の直前に置かれている。李・葉[2014: 2]を参照。

¹⁰ la PNG : pa DC. 以下、チベット語のテキストは P 版を底本とし、NDCGDh と校合して引用する。

smras pa / sTong pa nyid bdun cu pa dang rTsod pa bzlog pa gnyis dBu ma
las 'phros pa ste / rang gi rgyud gud na med pas logs shig tu bstod pa ma brjod de / 'di
ltar rTsod pa bzlog pa ni //

dngos po mams kyi rang bzhin ni // rkyen la sogs la¹¹ med pa ste //

rang gi dngos po yod min na¹² // gzhan gyi dngos po yod¹³ re skan //¹⁴

de la¹⁵ brgal ba dang lan btab par gyur pa'i phyir de las 'phros pa yin par mngon no
//

ji ltar sgyu ma rmi lam bzhin // dri za'i grong khyer ci 'dra ba //

de bzhin skye dang de bzhin gnas // de bzhin du ni 'jig par bshad //¹⁶

sTong pa nyid bdun cu pa ni de la brgal ba dang lan btab par gyur pa'i phyir de
las 'phros pa yin par mngon no //

Rigs¹⁷ pa drug cu pa 'di ni dBu ma bzhin du 'dir yang gtso bor rten cing 'brel
par 'byung ba dpvād pa las brtsams te¹⁸ byas pa'i phyir dBu ma las 'phros pa lta bu
ni ma yin no //¹⁹

なぜ『七十空性論』(Śūnyatāsaptati、以下SS)と『廻諍論』(Vigrahavyāvartanī、
以下VV)では、[ナーガールジュナ]師が[仏に対する]帰敬を述べず、こ
の『中[の論典]』(dBu ma、中の思想に関する論典=YS)で[帰敬を]述べた
のか。

¹¹ la ed. : pa PNDCG. MMK によつて、“rkyen la sogs pa med pa ste” を “rkyen la sogs la med pa ste” と訂正する。

¹² na PNG : te DC.

¹³ yod PNDCG. Scherrer-Schaub[1991](以下、YSVtr): yong.

¹⁴ na hi svabhāvo bhāvānām pratyayādiṣu vidyate | avidyamāne svabhāve parabhavo na vidyate || MMK 1.2, 葉[2011: 12].

Cf. MMK 1.3 Tib. PsP. p. 78 (n. 1) : dngos po mams kyi rang bzhin ni // rkyen la sogs la yod ma yin // bdag gi dngos po yod min na // gzhan dngos yod pa ma yin no //, YSVtr. p. 21 (n. 20).

¹⁵ de la ed. : rTsod pa bzlog pa ni de la PNDCG.

¹⁶ yathā māyā yathā svapno gandharvanagaraṃ yathā | tathopādas tathā sthānaṃ tathā bhaṅga udāhṛtam || MMK 7.34, Cf. YSVtr. p. 21 (n. 21).

¹⁷ rigs DC : rig PNG.

¹⁸ te PNG : te / DC.

¹⁹ YSV. P Ya 2b3-8.

答える。SS と VV の両論は『中[論]』 (=MMK) から展開されたものであり、[SS と VV]自体の[独自の] 文脈が別にはないので²⁰、独立して帰敬は述べられていない。なぜなら、VV は

「諸々の存在するものの自性 (rang bzhin, svabhāva) は、諸々の条件 (縁) の中にはない。自性が存在しないときに、他性はない。」 [MMK 1.2]

これ (MMK 1.2) に対する論難と回答であるので、それ (MMK 1.2) から展開されたものであるのは明らかである。

「幻のように、夢のように、ガンダルヴァの城 (蜃気楼) のごとく、そのように生じること、そのように住すること、そのように滅することが説かれた。」 [MMK 7.34]

SS はこれ (MMK 7.34) に対する論難と回答であるので、それ (MMK 7.34) から展開されたものであるのは明らかである。

YS は MMK と同様に、ここにおいてはまた主に縁起の考察から開始されて著されているので、MMK から展開されたようなものではない。

チャンドラキールティは、*「中観論讚」(**Madhyamakāśāstrastuti*, PsP 末尾の偈頌群) の中で、ナーガールジュナの著作として八つを挙げる²¹。これに対して、YSV の冒頭で、YS と対比されるのは VV、SS、MMK のみであり、MMK において帰敬偈がある直接の理由も言及されていない。ただしそこでは、YS、VV、SS はすべて MMK を主要な基準としている。その意味でもチャンドラキールティにとって MMK は関係する諸

²⁰ “rang gi rgyud gud na med pa”の訳例に関しては、『中辺分別論注』(*Madhyāntavibhāgaṭīkā*, P no. 5534, D no. 4032) のチベット訳を参照 (rang gi rgyud gud na med pa, 下線筆者)。kun nas nyon mongs pa'i phyogs nyid las mam par byang ba'i phyogs (phyogs P; phyogs nyid D) btsal bar bya ba'i (bya ba'i D; bya'i P) rang gi rgyud gud na med par rab tu bstan pa'i phyr 'di la zhes bya ba gsungs so (P Tshi 26a7, D Pi 195a5). saṃkleśapakṣād eva vyavadānapakṣo mārgayitavyo na punah prthaktvam asyāstīti pradarśanārtham āha atreti. Yamaguchi[1934: 13.11-12]を参照。

²¹ すなわち、『経集』(*Sūtrasamuccaya*)、『宝行王正論』(*Ratnāvalī*、以下 RV)、諸讚歌、MMK、YS、『広破論』(*Vaidalyaprakaraṇa*)、SS、VV である。de Jong[1962: 51.1-4]、津田[2019: 13]を参照。

論書の「根本」(mūla) であることが窺える²²。

上述した三つのポイントの中、(2) は (1) に対する補足的解説とも言える。VV に関しては、米澤[1992: 275, 272]が指摘したように、VV が MMK 1.2 から展開したものであることは VV のナーガールジュナの自注の冒頭部分からも明らかであり、全体は前半 20 偈 (pūrvapakṣa) の論難と、後半 50 偈の回答 (uttrapakṣa) からなる²³。一方、SS においては、多くの場合、ナーガールジュナの自注で論難と回答が為され、論の全体を前半と後半に分けるという構成はとらない。また、内容から言えば、SS が MMK から展開される点に関しては、VV と同じように、SS の第 1 偈からの冒頭部分に関係していると思われる。つまり、SS の第 1 偈は、生・住・滅等は仏によって真実として説かれるのではないという意味で、MMK 第 7 章の結論をまとめる最終第 34 偈と関連している。その後、この意味をめぐって、ナーガールジュナの自注は論難と回答で議論を展開する。一方、チャンドラキールティは SS に対する注釈のなかで、SS を次のように説明する。

(前略) 師匠 (ナーガールジュナ) の心の相統は智慧と方便 (*upāya) と悲 (*kṛpā) に従っているため、[SS の] 七十のシュローカによって [智慧の乏しい人々は] とりわけ優れた目的を成就するとご覧になって、要略して真実を確定するためにこの SS を著したのである²⁴。

チャンドラキールティにとって、SS の第 1 偈には、生・住・滅等は世間の言語習慣によるものであり、真実による説ではないと論じられているので、SS は具体的に MMK 第 7 章第 34 偈から展開されるものであり、

²² 津田[2019: 45]を参照。

²³ SS の偈頌数に関しては、王[2021]を参照。

²⁴ (前略) slob dpon gyi thugs kyi rgyud shes rab dang thabs dang brtse ba'i rjes su zhugs pa'i phyir tshigs su bca'd pa bdun cus kyang khyad par (par DC; om. PNG) du 'phags pa'i ('i PNG; om. DC) don grub par gzigs nas / mdor bsdus pas de kho na nyid nges pa'i don du *sTong pa nyid bdun cu pa* zhes bya ba (ba PNDG; om. C) 'di brtsams so // Cf. Erb[1997: 35, 212.12-15], 山口[1924: 25].

仏が説かれた真実を要約して確定するものである。

また、縁起の考察から始めるという (3) についても、前述した (1) と (2) と同様に、論の冒頭部分を MMK と対比することで、YS と MMK の両論がいずれも縁起の考察を行う独立した論書であるとチャンドラキールティが理解していることが分かる。

2. YSV の序説をめぐって

このように、帰敬偈が存在する理由の三つのポイントはすべて論の冒頭部分に関係する。それゆえ、以下では帰敬偈と論の冒頭部分の関連に目を向けたい。

チャンドラキールティは PsP と YSV の注釈全体の序説として、ナーガールジュナが帰敬偈を説くことについて、いかなる意図をもって縁起を説くのかという問題を論じている。PsP の冒頭で帰敬偈に対する注釈をなす際に、彼は MMK の関係 (sambandha) を説明し、ナーガールジュナが般若波羅蜜多の正しい方途を理解することを強調する。さらにまた、MMK の本論 (すなわち、第 1 章・第 1 偈) の注釈を始めるにあたり、ナーガールジュナが MMK において「不滅等 [の八不] によって限定される縁起」を説こうと望まれたことを説明する²⁵。チャンドラキールティの注釈によれば、MMK はナーガールジュナが第一の発菩提心をなし、般若波羅蜜多の方途を理解して、他の人々を覚らせるために、不滅等の八不によって限定される縁起を説明し、戯論の寂滅を目的とする論書であるという。

一方、YSV の冒頭では、チャンドラキールティは次のように説明する。

²⁵ idānīm anirodhādiviśiṣṭapratītyasamutpādapratipādayiṣayotpādapratīṣedhena nirodhādiviśiṣṭasaukaryam manyamāna ācāryaḥ prathamam evotpādapratīṣedham ārabhate | (MacDonald[2015: Vol. I. 137, §19]) 「今、不滅等 [の八不] によって限定される縁起を説明しようと望まれて、生を否定することによって滅等の否定が容易になると考えている師 (ナーガールジュナ) は、まさに第一に、生の否定を始められる。」

de la²⁶ slob dpon 'di ni (1) rten cing 'brel par 'byung ba ji ltar gnas pa bzhin du de kho na
gzigs pas dgyes pa'i khyad par brnyes pa ste /²⁷ de rtogs pa ni dad pa mchog gi gnas yin
 par mkhyen nas (2) rten cing 'brel par 'byung ba mthong ba las 'jig rten dang 'jig rten
 las 'das pa'i dge ba'i tshogs ma lus par 'byung ba dang 'phags pa'i gang zag ma lus
 par 'byung ba dang / sangs rgyas bcom ldan 'das ye shes²⁸ sgrub pa med pa dang ldan pa
 mams kyi mam pa thams cad²⁹ du de kho na³⁰ mngon par rdzogs par byang chub pa
 yang gzigs nas rten cing 'brel par 'byung ba rang bzhin gyis ma skyes pa'i phyir skye ba
 dang 'jig pa dang yod pa dang med pa'i mthar / rtog pa'i dri mas ma gos pa rten cing 'brel
 par 'byung ba ngo bo³¹ nyid kyis³² stong pa yin par che ba nyid kyis³³ brjod nas rten
 cing 'brel par 'byung ba 'chad par bzhed de / de ston pa'i de bzhin gshegs pa rten cing 'brel
 par 'byung ba'i ngo bo nyid dang tha mi dad par gyur pa la³⁴ gus pa skyes nas de la
 phyag 'tshal ba rtsom mo //

ここ (=YS) において、この師 (slob dpon, *ācārya) [ナーガールジュナ]は、
 (1) 縁起のあるがままに真実 (de kho na, *tattva) をご覧になったことにより、
 特別な喜び (dgyes pa'i khyad pa, prītiśeṣa) を得られ、それ (縁起) を理解す
 ることは最高の浄信の基礎 (dad pa mchog gi gnas, para(ma)prasādāyatana) であ
 るとお知りになり、(2) 縁起を見ることによって世間と出世間の善の糧が残ら
 ず生じることと、聖者 ('phags pa'i gang zag, *āryapudgala) が残らず生じること
 と、覆われることのない智を持つ仏世尊たちがあらゆる点で (mam pa thams
 cad du, *sarvathā) 真実を完全に悟られていることをもご覧になって、縁起し

²⁶ de la DC (cf. skt. iha) : de PNG.

²⁷ ihāyam ācāryo yathāvasthitapratītyasamutpādadarśanāsāditapṛītiśeṣaḥ para(ma)-
 prasādāyatanaṃ tadadhigama(m a)vetya pratītyasamutpādadarśanaprabhā... ihāyam :
 Ms. ihāyām. 李・葉[2014: 126]を参照。

²⁸ ye shes PNDC : ཡེ་ཤེས་ G. ye (sh)es の縮約形。

²⁹ thams cad PNDC : thad G. tha(ms ca)d の縮約形。

³⁰ de kho na PNG : de kho na nyid DC.

³¹ ngo bo PNDC : ལྟོ་བོ་ G.

³² kyis PNDC : kyi G.

³³ kyis DC : kyi PNG.

³⁴ la PNG : la / DC.

たものは自性をもって生じていないのであるから、生じることと滅すること及び有と無の極端に対する分別の汚れによって汚されず、縁起は本質を欠いていること (=本質が空であること, ngo bo nyid kyis stong pa) であって偉大なもの³⁵として語られて、縁起を説明しようと望まれた。縁起の本質と異なることのない、それ(縁起)を説かれる如来に対して敬意を生じ、その方に対する敬礼から始める。

この序説においては、ナーガールジュナがご覧になった内容によって、二つの部分に分けることができる。第一は、縁起のあるがままに真実をご覧になったことにより、「特別な喜び」を得て、縁起を理解することは「最高の浄信の基礎」であると知られた、ということ。さらに第二は、縁起を見ることによって、世間と出世間の善の糧とすべての聖者が生じ、仏世尊たちがあらゆる点で真実を完全に悟られるとご覧になって、生・滅及び有・無の極端に対する分別の汚れによって汚されない縁起は本質を欠いている、と述べている点である。チャンドラキールティによれば、ナーガールジュナは、縁起は浄信、善の資糧、聖者、仏の悟りを生じるという実践上の意義や働きをもつと考えて、YS を著し縁起を説明するという。

これら二つの部分では、「特別な喜び」は前述の PsP で説かれたように、ナーガールジュナが歡喜 (pramuditā) という菩薩の初地を獲得した

³⁵ 「偉大なものとして (che ba nyid kyis, *māhātmyam, māhātmyena)」に関しては、以下の PsP の序説部分を参照 (māhātmya, che ba'i bdag nyid)。svayam eva cācāryo vaksyamāṇasakalaśāstrābhidheyārthaṃ saprayojanam upadarśayamś tadaviparītasamprakāśakatvena māhātmyam udbhāvya tatsvabhāvavyatirekavartine paramagurave tathāgatāya śāstrapraṇayananimittakaṃ praṇāmaṃ kartukāma āha -- **anirodham anutpādam anucchedam aśāsvatam | anekārtham anānārtham anāgamam anirgamam || yaḥ praṭṭīyasamutpādam ityādi || Cf. MacDonald[2015: Vol. I. 117-118, §3, Vol. II. 15, 390].**

ことを暗示している。一方また、最高の浄信の基礎³⁶は「縁起を理解すること」であるとも説明されている。後述の帰敬偈に対する四つの解釈の中で言及されるように、縁起を見ることによって最高の賢者となるからである。

また、YSV の序説における (2) の部分は、縁起は最高の浄信の基礎であることとも関連している。そのなかで、チャンドラキールティは、縁起の実践的意義を説明とともに、「生じることと滅すること及び有と無の極端に対する分別の汚れによって汚されず」「本質を欠いている」として縁起を限定する。これら生滅・有無等のキーワードは、以下のように、YS の帰敬偈と第 1 偈の内容に従っている。

Tib : gang gis³⁷ skye dang 'jig pa dag // 'di yi³⁸ tshul gyis³⁹ rab spangs pa⁴⁰ //⁴¹
 rten cing 'byung ba gsungs pa yi⁴² // thub dbang de la phyag 'tshal lo //⁴³ [kār 0]
 gang blo yod dang med pa las // nam par 'das shing mi gnas pa //
 de dag zab mo dmigs med pa 'i⁴⁴ // rkyen gyi don la mam par bsgom⁴⁵ // [kār 1]
 Skt : *yenānena vidhānena prahñāv udayavyayau |*
namas tasmai munīndrāya praṭītyotpādavādine ||⁴⁶ [kār 0]

³⁶ 「浄信の基礎」については、チャンドラキールティの『菩薩瑜伽行四百論注』(*Bodhisattvayogācāracatuhśatakaṭīkā*) 5.1cd に対する注釈を参照。Cf. Suzuki [1994: 76], 上田[1994: 69].

³⁷ gis DhDh¹P¹N¹G¹P²N²D²C²G²: dag PNDCG, gi D¹C¹, cf. YSVtr. p. 20 (n. 12).

³⁸ 'di yi PNDCGP²N²D²C²G²: 'di'i DhDh¹.

³⁹ gyis PNDGP²N²D²C²G²: kyis CDh, gis Dh¹.

⁴⁰ pa Dh¹PNDCGP²N²D²C²G²: pa' Dh.

⁴¹ tshul 'di yis ni spangs gyur pa P¹N¹D¹C¹G¹.

⁴² 'byung ba gsungs pa yi DCP¹N¹D¹C¹G¹P²N²G²: 'byung ba gsung ba'i Dh, 'byung ba gsung ba yi Dh¹, 'brel pa gsungs pa yi PNG, 'brel 'byung gsung ba yi D²C². Cf. YSVtr. p. 20 (n. 16).

⁴³ YSV. P Ya 2b2-3.

⁴⁴ pa'i PNDCG: pa yi Dh.

⁴⁵ bsgom PNDCG: sgom Dh.

⁴⁶ Cf. *namas tasmai munīndrāya praṭītyotpādavādine* | [Kār 0ab], 李・葉[2014: 2]. こ

astināstiviyatikrāntā buddhir yeṣāṃ nirāśrayā |

gambhīras tair nirālambaḥ pratyayārtho vibhāvyaṭe || [kār 1]⁴⁷

生じることと滅することという両者をこの道理によって断たれたので、縁起を説かれる、その最高の賢者に敬礼します。[kār 0]

有と無を超えた、住しない知をもつ人々⁴⁸は、深遠で、対象化されることがない (dmigs med pa, nirālamba) 縁の意味を明らかに知る。[kār 1]

この両偈の中で、帰敬偈は生滅の否定に、また第 1 偈は有無の否定に言及する。また、第 1 偈の内容については、YSV によれば、「本質を欠いている (=本質が空であること, ngo bo nyid kyis stong pa)」が、第 1 偈の [分別によって]「対象化されることがない」(nirālamba, dmigs med pa) ことに関係するとして注釈を加えている。すなわち、チャンドラキールティは「対象化されることがない」に対して次のように注釈する。

愚かな人々には恐れられ、また、彼らは入ることができないので、「深遠」である。自性をもって生じないので、有と無の極端及び中間という分別の対象 (yongs su brtag pa'i yul, *parikalpita-viṣaya) として認識されないので、「対象化されることがない」のである⁴⁹。

ここでは、この偈を[Kār 0cd]とし、[Kār 0ab]はKumar[1993]によって想定する。

⁴⁷ 李・葉[2014: 2-5].

⁴⁸ 住しないは有・無を超えた中間がないと意味している。mtha' gnyis de las (las NDCG; om. P) lhag pa'i dbus med pa'i phyir de la yang gnas pa med pas **mi gnas** so // (YSV. P Ya 4b2-3) 「その二つの極端を超える中間がないので、それにおいて住することもないので、「住しない」である。」

⁴⁹ skye bo byis pa mams la 'jigs par byed pa dang / de dag 'jug mi nus pa'i phyir **zab pa'o** // rang bzhin gyis mi skye bas yod pa dang med pa'i mtha' dang dbus yongs su brtag pa'i yul du dmigs par mi nus pa'i phyir **dmigs su med do** // (YSV. P Ya 4a3-4). また YS 第 19 偈を参照。

この注釈内容は序説の説明とも一致している。さらにまた、第1偈に見るように、「対象化されることがない」ことはほかならぬ「縁[起]の意味」⁵⁰である。

以上のように、チャンドラキールティによる YSV の序説、および YS の帰敬偈と第1偈によれば、ナーガールジュナは、縁起は最高の浄信の基礎であり、善の資糧、聖者、仏の悟り等を果たす実践上の意義と働きをもつと考えて、縁起ゆえに「本質を欠いている」ことから、生滅・有無という分別を離れ、「対象化されることがない」ことを意味する縁起を YS によって説くことを望んだという。このようにチャンドラキールティは、ナーガールジュナが般若波羅蜜多の方途を理解して、八不によって限定される縁起を説き、戲論の寂滅を目的としたという MMK とは異なる意味づけを、この YS に与えていることが窺える。

3. YS の帰敬偈に対する四つの解釈

次に、チャンドラキールティがなす、YS の帰敬偈に対する四つの解釈を考察する。YS の冒頭には、ナーガールジュナの帰敬偈が以下のような内容で置かれている。

Tib : gang gis skye dang 'jig pa dag // 'di yi tshul gyis rab spangs pa //
 rten cing 'byung ba gsungs pa yi // thub dbang de la phyag 'tshal lo //⁵¹
 Skt : *yenānena vidhānena prahīnāv udayavyayau |*

⁵⁰ [kār 1d] に対する注釈において、YSV は「縁」を縁起と理解する。skye bo byis pa'i blo'i spyod yul ma yin pa yod pa dang med pa'i mthar rtog pas myog pa'i dri mas ma sbags pa rten cing 'brel par 'byung ba zab mo 'phags pa Śā ri'i bu la sogs pas khong du chud par dmigs te / (YSV. P Ya 4a7-8) 「...愚かな人の知の対象領域でなく、有と無の極端を考えることによって引き起こされる汚れに汚されていない深遠な縁起を、聖者シャーリプトラ (舍利弗) 等は理解することが認められる。」

⁵¹ 前出注 37-43, 46 参照。

namas tasmai munīndrāya praṭīyotpādāvādinē ||

生じることと滅することという両者をこの道理によって断たれたので、
縁起を説かれる、その最高の賢者に敬礼します。[kār 0]

チャンドラキールティは、ナーガールジュナによるこの帰敬偈の中の
関係代名詞 *gang gis (*yena)* の解釈にも関係して、敬礼行為の四つの理由
を解説する。すなわち、順に (1) 縁起を説く最高の賢者であり、[生滅
等の]無二を説く最高の教師であるから、(2) [縁起を説いて] 生・滅の
両者を断たれたので、(3) [諸々の事物の]生滅が断たれて、世人をよく
利益するから、(4) [後に出る最高の賢者の教説によって] 自らの心の確
立が成就しているので、という四つの理由で、その縁起を説く最高の賢
者に敬礼をなすと解説する。

以上の四つの解釈は、いずれもナーガールジュナによる敬礼行為の理由
を、段階的に、四種類に分けて説明するものであり、文法的には *gang gis*
(*yena) は最高の賢者である仏を指し、*tasmai* に繋がる。*gang gis* (*yena) に
よって生滅を断たれた仏の行為が従属節の中で示され、敬礼対象である
仏の形容句として「最高の賢者」(*munīndra*) および「縁起を説かれる」
(*praṭīyotpādāvādin*) が置かれる。以下では、これら (1) ~ (4) の四
つの理由説明を順に考察したい。

(1) 縁起を説く最高の賢者であり、[生滅等の]無二を説く最高の教師
であるから

この解釈においては、チャンドラキールティは、空性論者たちが認め
る縁起を相互に依存することと理解し、またそのような仏が説かれる縁
起は諸々の事物の生滅を否定すると解説する。それゆえチャンドラキ
ールティは、仏が生滅のない「無二」をも説かれるので、ナーガールジュ
ナが仏に対して「最高の賢者」(*munīndra*) と見て敬礼する、として第一の敬
礼行為の理由を説明している。

この中でチャンドラキールティは、前述した序説と帰敬偈が置かれる理由を述べた後に、まず「縁起を説かれる」と「最高の賢者である」の関連を次のように解釈する。すなわち、外道の主張を捨てても、二諦を顛倒して見る人は、涅槃城に至ることができない。これに対して、ほかならぬ仏が「此れを縁とするのみ (*idam-pratyayatā-mātra, 唯此縁性)」を意味する縁起を説かれることは、二諦を正しく見ることを原因とするのであり、すべての聖者が行く涅槃への大道である⁵²。それゆえ、すべての福德と智

⁵² de la ngo bo nyid dang dbang phyug la sogs par smra ba ngo bo nyid dang dbang phyug dang rang bzhin dang skyes bu dang dus dang sred med kyi bu la sogs pa las 'gro ba mams kyi skye ba dang 'jig pa la sogs pa khas len pa dag thams cad btang bas mya ngan las 'das pa'i grong khyer du 'gro 'dod kyang bden pa gnyis phyin ci (phyin ci DC; phyin ci ma PNG) log par mthong ba las nyams pas phyr phyogs pa bzhin du 'khor ba mam (mam DC; mams PNG) par chad pa'i mtshan nyid mya ngan las 'das pa'i grong khyer du yun ring mor yang 'gro mi nus so // rten cing 'brel par 'byung ba bstan pa rkyen nyid 'di pa tsam 'di ni bden pa gnyis phyin ci ma log par mthong ba'i rgyur gyur pa'i phyr 'phags pa'i skye bo thams cad gshegs shing rjes su gshegs pa drang (drang PNG; dang DC) po zla med (med NDCG; mad P) pa / 'dus byas thams cad yongs su spangs pa / mya ngan las 'das pa'i grong khyer du gcig tu gzhol bar 'gyur ba'i lam (lam PNG; om. DC) chen po'o // de bas na de ston pas bsod nams dang ye shes kyi tshogs ma lus pa'i dbang phyug phun sum tshogs pa ston pa bla na med pa ni nyan thos dang rang sangs rgyas thub pa mams kyi gso bo yin pas thub pa'i dbang por dga' ba ma yin te / rten cing 'brel par 'byung ba ston par gyur pa nyid kyi phyr thub pa'i dbang po yin par rtogs nas / rten cin 'brel 'byung gsung ba yi // thub dbang de la phyag 'tshal lo // zhes bya ba smos so // (YSV. P Ya 2b8-3a7.)

「その [YS の帰敬偈] に関して、自然 (ngo bo nyid, *svabhāva) や自在神 (dbang phyug, *īśvara) 等を説き、自然、自在神、原質 (rang bzhin, *prakṛti)、純粹精神 (skyes bu, *puruṣa)、時間 (dus, *kāla)、ナーラーヤナ (sred med kyi bu, *Nārāyaṇa) 等によって、諸々の世界 ('gro ba, *jagat) の生じることと滅すること等を主張する者たちは、すべてを捨てて涅槃の城に行こうと望むが、二諦を顛倒して見ることによって損なわれるので、背を向ける人のように、輪廻を断つことを特徴とする涅槃の城に長い時間かけても行くことができない。縁起説、[すなわち] この「此れを縁とするのみ (*idam-pratyayatā-mātra)」は、二諦を顛倒することなく見ることを原因とするので、すべての聖者が行かれ、従い行かれる、最高で無比の、すべての有為が断たれる、涅槃の城に向かう唯一の大道である。それゆえ、それ (縁起) を説くことによって、すべての福德と智慧の資糧を自在に備えた最高の教師 (*anuttaraśāstr) (=ブツダ) は、声聞や独覚である諸々の賢者 (牟尼) の中の上首であるから最高の賢者であることを喜ぶのではなく、ほかならぬ縁起を説く人であるから「最高の賢者」なのでであると [ナーガール

慧の資糧を自在に備えた仏は、声聞や独覚である諸々の賢者(牟尼)の中の上首であるからではなく、ほかならぬ縁起を説く人であるから「最高の賢者」なのである。さらにまた、仏以外の声聞・独覚等の聖者には縁起を説く能力がなく、仏のみが縁起を説くことができる。それゆえ、ナーガールジュナは仏を「最高の賢者」と見て、「その最高の賢者に敬礼します」と敬意を表明する⁵³。

ここでは、チャンドラキールティは縁起に対して「唯此縁性, *idam-pratyayatā-mātra」によって限定する。詳細な注釈は加えられていないが、この限定は仏を最高の賢者と見ることと深く関わっている。つまり、このような意味を持つ縁起を説くことこそが最高の賢者であることの根拠である。これに関してチャンドラキールティは、空性論者たちが認める縁起を次のように説明する。

gal te gcig la gcig bltos⁵⁴ pa'i phyir gnyi ga mi 'grub po zhe na / smras pa /⁵⁵ 'di lta
ste gcig la gcig bltos⁵⁶ pa gzhan ngo bo nyid kyis mi skye mi 'gag ces bya ba gang
yin pa de rten cing 'brel par 'byung ba ste / de nyid stong pa nyid du smra ba
mams 'dod do // rten cing 'brel par 'byung ba gsung ba 'ba' zhid gi phyir de thub pa'i

ジュナ師は] 理解して、「縁起を説かれる、その最高の賢者に敬礼します」と述べた。」

⁵³ rten cing 'brel par 'byung ba gsung ba ni thub pa'i (gsung ba ni thub pa'i PNG; ni DC) dbang po ma yin pa mi 'byung ngo // rten cing 'brel par 'byung ba (ba DCG; bar PN) gsung ba ni thub pa'i dbang por 'gyur ba'i phyir rgyu'o // thub pa'i dbang por gyur pa yang rten cing 'brel par 'byung ba gsung ba'i rgyu ste / gzhan rten cing 'brel par 'byung ba 'chad nus pa med pa'i phyir ro // nyan thos dang rang sangs rgyas dang byang chub sems dpa' mams kyang thub pa'i dbang pos bstan pa nyid kyi phyir de 'chad nus so // (YSV. P Ya 3a7-3b1) 「縁起を説かれる人は、最高の賢者でない人にはならない。縁起を説かれる人は、最高の賢者になるための根拠である。最高の賢者であることも縁起を説かれることの根拠である。他の人は縁起を説明する能力がないからである。声聞たちと独覚たちと菩薩たちも、最高の賢者によって説かれたからこそ、それ(縁起)を説明することができる。」

⁵⁴ bltos PNG : ltos DC.

⁵⁵ pa / PNG : om. DC.

⁵⁶ bltos PNG : ltos DC.

dbang por gyur pa ma yin gyi / dngos po mams gcig la gcig bltos⁵⁷ pa'i grub pa'i
 tshul gsung ba na dngos po mams kyi skye ba dang 'jig pa bkag pa'i phyir ro // gang
 gis zhes bya ba ni rgyu ste / des kyang gnyis su med pa ston pa'i phyir ston pa bla na
 med pa thub pa'i dbang po mthong nas / **thub dbang de la phyag 'tshal lo** // zhes
 bya ba smos so // (YSV. P Ya 3b1-5)

もしも、[諸々の事物が] 相互に依存するので両方とも成立しない⁵⁸と [反論者が] いうなら、答える。すなわち、相互に依存すること、さらにまた本質をもって (ngo bo nyid kyi) 生じない、滅しないということが縁起であり、ほかならぬそのことを空性論者たちは認める。単に縁起を説いたことのみで理由で彼は最高の賢者になったのではなく、諸々の事物は相互に依存して成立するという道理 (tshul) を説くときに、諸々の事物の生滅を否定したからである。[帰敬偈の中の]「**によって (*yena)**」とは理由 [を示す関係代名詞] であり、すなわち、彼 (=ブツダ) はまた [生滅等に関する] 無二を説くので無上の教師として最高の賢者であると [ナーガールジュナ師は] 見て、「**その最高の賢者に敬礼します**」と述べたのである。

この注釈によれば、チャンドラキールティにとって、事物が相互に依存することは、事物が本質をもって生じることも滅することもないということであり、生滅を否定することでもある。それゆえ、縁起には相互に依存することと、本質をもって生じることも滅することもないという両側面がある。この両側面は、先に見た世俗と勝義の二つの真理 (諦) にそれぞれ関わるものであり、この二諦を根拠とする縁起をチャンドラキールティは「唯此縁性」と呼んでいる⁵⁹。まさにこの意味によって、相互に依存する事物が、相互に依存するがゆえに自性をもつことはなく、本質

⁵⁷ bltos PNG : ltos DC.

⁵⁸ gcig la gcig bltos pa'i phyir gnyi ga mi 'grub po: *parasparāpekṣatvāt ubhayāsiddhiḥ, MA VI. 58cd, YSVtr. p. 111 (n. 26) を参照。

⁵⁹ 新作[2020: 977-976 Text 4-5]によれば、「唯此縁性」という縁起を説くときには、常・断、有・無の二つ等の分別がありえない。また、「唯此縁性」によって、世俗の成立は承認されるが、自性的な成立はないという。新作[2020: 977-974]を参照。

をもって生じることも滅することもことない。このように、仏が説かれる縁起は、生滅・有無等二つの極端⁶⁰を断つのである。これはまた YSV の序説に説かれた生滅・有無によって汚されない縁起と一致する。このように、ナーガールジュナによれば、仏は無二を意味する縁起を説く無上の教師であり、その意味でまた「最高の賢者」であるから、そのような仏に対して敬礼をなすのであるという。

(2) [縁起を説いて] 生・滅の両者を断たれたので

第一の理由説明とも関連して、二番目の解釈としてチャンドラキールティが強調するのは、仏が縁起を説かれるとき、縁起によって事物の生滅を断たれた (*prahīṇāv udayavyayau) からという理由である。それゆえ、その最高の賢者に敬礼をなすと理由づけている。

yang na thub pa'i dbang po gang gis rten cing 'brel par 'byung ba gsung ba na / rten cing 'brel par 'byung ba'i **tshul** 'di nyid do // rim pa 'dis dngos po mams kyi skye ba dang 'jig pa bkag pas **thub dbang de la phyag 'tshal lo** // (YSV. P Ya 3b5-6.)

あるいはまた、最高の賢者は縁起を説かれるとき、ほかならぬこの[前述した空性論者が認める「相互に依存すること、さらにまた本質をもって生じない、滅しない」というのが]縁起の「道理 (tshul)」である。この次第によって (rim pa 'dis, *anena krameṇa)、諸々の事物の生じることと滅することを否定されたので、「その最高の賢者に敬礼します」。

⁶⁰ また、ここに言及される「無二 (gnyis su med pa)」に関しては、瓜生津[1985: 93]は帰敬偈に説かれる生滅を断つことを指すと考えるが、MA の解釈によれば、無二の「二」は「存在と非存在等という二つの極端 (dngos po dang dngos po med pa la sogs pa mtha' gnyis)」を意味するという。gnyis su med pa'i blo ni / dngos po dang dngos po med pa la sogs pa mtha' gnyis dang bral ba'i shes rab bo // 「無二の知とは、存在と非存在等という二つ極端を離れる智である」(瓜生津・中沢[2012b: 29. 1-2], YSVtr. p. 112-113 (n. 29))。また、PsP において「二つの極端」に対する説明については MacDonald[2015: Vol. II. 7 (n. 15)]を参照。

(3) [諸々の事物の]生滅が断たれることにより、世人をよく利益するから

三番目の解釈では、チャンドラキールティは生滅を断つことの世間的な意義を強調する。すなわち、前述のような縁起を説くことは世人をよく利益するのである。gang gis (*yena) という関係詞は、礼拝する理由を表すとも付言する。

yang na **gang gis** zhes bya ba ni rgyu kho na ste⁶¹ / gang gi phyir thub pa'i dbang po des dngos po mams kyi rten cing 'brel par 'byung ba ston pa na⁶² rang bzhin gyis dngos po mams kyi skye ba dang 'jig pa bkag pas **thub dbang de la phyag 'tshal lo** // 'jig rten rnams la shin tu phan 'dogs pa'i phyir zhes bya ba'i tha tshig go // (YSV. P Ya 3b6-7)

あるいはまた、「**によって**」(*yena) というのはほかならぬ理由 [を示す関係詞] であり、すなわち、その最高の賢者によって、諸々の事物の縁起 (= 相互に依存して生じること) を説くとき、自性をもって諸々の事物が生じることと滅することを否定されたので、「**その最高の賢者に敬礼します**」。「諸々の世人をよく利益するからである」という意味である。

この解釈によると、帰敬偈の意味は、「この[縁起の]道理によって、[諸々の事物の]生じることと滅することが断たれ、これによって諸々の世人をよく利益するので、縁起を説かれ、最高の賢者である仏に敬礼します、という意味になる。

(4) 後に出る仏の教説によって自らの心の確立が成就しているので

最後の解釈では、ナーガールジュナは、YS の後の部分で述べられる最高の賢者の教説によって、自らの心の確立が成就しているという理由で、

⁶¹ ste DC : te PNG.

⁶² na DC : om. PNG.

仏に対して礼拝をなすという。チャンドラキールティは次のように説明する。

yang na 'og nas 'byung ba thub pa'i dbang po'i gsung rab la⁶³ brten te / rang gi sems
la bkod pa grub par mthong nas /⁶⁴ **gang gis skye dang 'jig pa dag // 'di yi tshul
gyis rab spangs pa // zhes bya ba smos te / rten cing 'brel par 'byung ba yi'o⁶⁵ // de'i
phyir thub dbang de la phyag 'tshal lo // zhes bya'o //**

あるいはまた、(ナーガールジュナは) 後に出る最高の賢者の教説 (*pravacana) に依り、自らの心の中で考え立てられたもの (=理解) が成立しているのを見て、「その方 (=仏) により、生じることと滅することの両者が、この道理によって断たれた」と述べた。すなわち縁起の[道理]である。それゆえ、「その最高の賢者に敬礼します」と言う。

この解釈では、ナーガールジュナは最高の賢者の教説 (gsung rab, *pravacana) によって、自分の心の中に打ち立てたものが成立して、「その最高の賢者を敬礼します」と言う。その心の中に打ち立てたものは、ナーガールジュナには、仏がその教説によって、縁起の道理によって生滅を間違いなく断たれたのであるという理解であり、確信であるといえる。この第四の解釈は YS 全体の意味づけとも関係する重要なものであり、次節であらためて検討したい。

4. 四番目の解釈に関する仏の教説

四番目の解釈では、後に出る最高の賢者、すなわち仏の「教説 (gsung rab, *pravacana)」が言及される。チャンドラキールティが、ナーガールジュナの帰敬偈をこの「教説」によって解釈する点は見逃せない。

四番目の解釈における「教説」のチベット訳は単数形であるが、これに

⁶³ la DC : las PNG.

⁶⁴ /NDCG : //P.

⁶⁵ yi'o PNG : yi DC.

関して、第2偈に対する注釈によれば、その教説は主に YS の第35偈の内容を指すという⁶⁶。また、YS の第1偈では、知が有・無を超える人は縁起の意味を理解すると説いて、一方、第2偈では、無をすでに排除されたので、YS においては仏の教説によって有を排除する正理を説くと述べる⁶⁷。チャンドラキールティは、第2偈に対して次のように注釈する。

rten cing 'brel par 'byung ba tshe rabs gsum pa dang / sems can⁶⁸ thams cad kyi spyi'i las kyi bskyed pa'i⁶⁹ snod kyi 'jig rten sna tshogs rnam par gzhog pa na /⁷⁰ de *Chos mngon pa* las mam par bzlog go // de bas na de ltar pha rol dag la gsal ba'i phyir de yang rigs⁷¹ pa mi bshad do // yod pa bzlog pa ni

dge slong dag 'di lta ste / mi bslu⁷² ba'i chos can mya ngan las 'das pa 'di ni bden pa'i mchog gcig pu'o // 'du byed thams cad snod kyi 'jig rten⁷³ ni⁷⁴ brdzun pa bslu ba'i chos can no // kye ma 'du byed nmams mi rtag /

ces bya ba la sogs pa bshad pa na / bcom ldan 'das kyi gsungs so //

de lta mod kyi de phyir zhing btud de gzhung gcig tu ma gsungs la / byis pa dag yun ring po nas yod par lta ba la goms pas de'i phyir thub pa'i dbang po'i gsung rab de dang de dag las bshad pa'i gsung rab las btus te / rab tu byed pa 'dir bsdus pa nyid

⁶⁶ Cf. YSVtr. p. 114 (n. 37), 122-123 (n. 65-66).

⁶⁷ nyes pa thams cad 'byung ba'i gnas // med pa rnam par bzlog zin gyis (gyis PNDCG, kyi Dh) // rigs pa gang gis yod pa yang // bzlog par bya ba mnyan par gyis // [kār 2cd] (李・葉[2014: 6-7]) 「すべての過失が生じる拠り所である無は既に排除されているなら、正理によって、有も排除されるべきであることを聞かれよ！」

⁶⁸ can PDCG : cad N.

⁶⁹ pa'i ed. : pa PNDCG.

⁷⁰ / DC : om. PNG.

⁷¹ rigs DC : rig PNG.

⁷² bslu PNG : slu DC.

⁷³ 'du byed thams cad snod kyi 'jig rten PNDCG. YSVtr は du byed thams cad とし て読む。Cf. YSVtr. p. 27 (n. 93).

⁷⁴ ni PNG: mi DC.

kyis ⁷⁵ rigs⁷⁶ pa gang gis yod pa yang // bzlog par bya ba mnyan par gyis //⁷⁷
[kār 2cd]

三世の縁起と、すべての有情の共通する行為（共業）によって生じる様々な器世間⁷⁸が定立されるとき、それ（無見）はアビダルマの中で排除される。それゆえ、このように他の人々（*pare, 反論者たち＝伝統的なアビダルマに従う人々）には明らかなので、彼（ナーガールジュナ師）も〔無見を排斥するための〕論理を〔ここでは〕述べない。〕有を排除することについては、
「比丘たちよ、すなわちこの欺かない性質をもつ涅槃は唯一の最高の真理（bden pa'i mchog gcig pu）である。すべての行（'du byed）〔と〕器世間は虚妄（brdzun pa）であり、欺く性質をもつ。』⁷⁹「ああ、諸行（'du byed mams）は無常である」⁸⁰

云々と説くときに世尊が述べられている。そうではあるけれども、そ〔の世尊の当該の教え〕にさらにまた敬意を払って同一の〔経典の〕テキスト（gzhung, *grantha）では説かれずに、愚かな人々は長い間に有見を習いとするので、それゆえ、最高の賢者のあれこれの教説（*pravacana）の中で説かれる教説から集められた、まさにこの小論（rab tu byed pa, *prakaraṇa）の中

⁷⁵ / PNG : // DC.

⁷⁶ rigs DCDh : rig PNG.

⁷⁷ YSV. P Ya 5a7-b3.

⁷⁸ *sarvasattvānāṃ sādharmaṇakarmaṇotpādītā bhājanalokāḥ. Cf. YSVtr. p. 122 (n. 64).

⁷⁹ Cf. Taṃ hi, bhikkhu, musā yaṃ mosadhammaṃ, taṃ saccaṃ yaṃ amosadhammaṃ nibbānaṃ; tasmā evaṃ samannāgato bhikkhu iminā paramena saccādhiṭṭhānena samannāgato hoti. Etaṃ hi, bhikkhu, paramaṃ ariyasaccaṃ yad idaṃ amosadhammaṃ nibbānaṃ. (MN III 245.16-21.)

この教説はYSの第35偈に関係する。また、MMK 13.1に対する注釈等においてもこの経に言及する。Cf. tan mṛṣā moṣadharmā yad idaṃ saṃskṛtaṃ | etad dhi khalu bhikṣavaḥ paramaṃ satyaṃ yad idaṃ amosadharmā nirvāṇaṃ sarvasaṃskārāś ca mṛṣā moṣadharmāṇa. (PsP. p. 237.11-12.) etad dhi bhikṣavaḥ paramaṃ satyaṃ yaduta amosadharmā nirvāṇaṃ, sarvasaṃskārāś ca mṛṣā moṣadharmāṇaḥ. (PsP. p. 41.4-5.) See YSVtr. p. 122-123 (n. 65).

⁸⁰ この教説はYS第21-22偈に対する注釈（YSV. P Ya 18b7-19b2）に関係する。Cf. anityā bata saṃskārā utpādayayadharmiṇaḥ, utpadya hi nirudhyante teṣaṃ vyupaśamaḥ sukham. (*Udānavarga* I.3. Bernhard, Franz[1965-1968: vol. I. 96]). See YSVtr. p. 123 (n. 66), 200 (n. 342).

に集約された「**正理**によって、**有も排除されるべきであることを聞かれよ!**」

この注釈によれば、チャンドラキールティにとって、YS が批判する対象は、序説に説かれた「自然と自在神」等の外道の邪見を捨てた、仏教内部のアビダルマに従って有見を習いとする人々⁸¹である。また、YS の内容は、主に有見を排除するための正理 (*yukti) であり、それはまたナーガールジュナによって最高の賢者である仏の様々な教説から集約されたものであるという。それらの教説の中でも代表となるのは、上記の引用の中で「涅槃は、唯一の最高の真理である」と説かれたものであり、以下に引用する YS 第 35 偈の内容と一致する。

mya ngan 'das pa bden gcig pu⁸² // rgyal ba mams kyis mam⁸³ gsungs pa //
de'i⁸⁴ tshe lhag ma log pa zhes // mkhas pa su zhig rtogs⁸⁵ mi byed // [kār 35]

涅槃は唯一の真理 (諦) である、と勝者たち (=諸仏) によって説かれている。そのとき、他のものは虚妄である、と智者なら誰が考えないであろうか。

帰敬偈の敬礼行為に関する第四の理由説明に「後に出る最高の賢者の教説」は、ここに見る YSV 第 2 偈に対する注釈内の「最高の賢者のあれこれの教説 (*pravacana)」と深く関係し、それらの教説を代表するのが上に引用した第 35 偈が語る「[涅槃は唯一の真理 (諦) である、と] 勝者たちによって説かれている (rgyal ba mams kyis mam gsungs pa)」という表現と関わるであろう⁸⁶。

⁸¹ アビダルマに従っている有見を習う人々に関しては拙論[2020: 410-409]を参照。また、YSV において YS の第 41 偈に対する導入部分 (YSV.PYa 26b5-7) を参照。

⁸² pu PNDCG : du Dh.

⁸³ mam PNG : nam Dh, mams DC.

⁸⁴ de'i PNDCG : de Dh.

⁸⁵ rtogs PNDCG : rtog Dh.

⁸⁶ 類似した説明は輪廻が無始であることを説く YS の第 13 偈にも見られる。チャンドラキールティは PsP の第 1 章の中で、生滅の縁起と不生不滅の縁起に対して了義と未了義の教説を確定するために、三つの教説を引用する。その中

さらにまた、この第2偈後半の注釈内でチャンドラキールティは、このYSが仏の様々な教説を集約した正理(*yukti)によって有を排除するために説かれた小論であると意味づけている点は重要である。つまり、YSという帰敬偈を含めて総計61の偈頌からなる小論は、縁起を説かれた最高の賢者の様々な教説を集約した正理を明らかにし、それによって有見を排除するという。すなわち、仏教内部のアビダルマに従う有見を習いとする人々に対して、欺くことのない涅槃に向かう大道を説く論書であることを語るとともに、有見を排除する正理によって、不生不滅の縁起を理解させようとする。その中でも、第35偈は、唯一にして最高の真理である涅槃を説く教説として重要な意味をもつ偈頌であるといえる。

5. まとめ

本稿では、YSの帰敬偈に対するチャンドラキールティの注釈内容に焦点を当てて考察を加えた。チャンドラキールティが中観論書の一つと意味づけるYSに関して、以下のような結論が導かれる。

(1) チャンドラキールティはMMKと、同じく中観論書と位置づけるYS、SS、VVとの関係を論じる際に、いずれもYS、SS、VVの第1偈からの冒頭部分に関連して判定する。

(2) チャンドラキールティは、YSはMMKと同様に縁起の考察から始めるので、ナーガールジュナによる独自の著作目的をもつ独立した論書として理解している。PsPにおいてチャンドラキールティは、MMKに関して、般若波羅蜜多の方途を理解するナーガールジュナが、他の人々を覚らせ、戯論の寂滅ためにMMKを著したという。一方、縁起の実践上の意義と働きを理解するナーガールジュナが、有見を排除するために、仏教内部のアビダルマに従う人々に対してYSを著したとチャンドラキ

では、YS第13,35偈とも関連する、MMK 11.1, 13.1を論拠とする。MacDonald [2015: Vol. I. 198-207, §71-73]を参照。

ールティは意味づける。

(3) YS に説かれる縁起の意味の重点は MMK とは異なる。MMK が不生不滅等の八不によって限定される縁起を説明するのに対して、YS は仏の教説 (*pravacana) を集約した正理 (*yukti) によって、生滅・有無という分別を離れ、対象化されることがない縁起を説くと意味づける。

(4) チャンドラキールティは YS の帰敬偈を注釈する際に、ナーガールジュナの四つの礼拝理由を順次に説明する。チャンドラキールティにとって、縁起は相互に依存すること、さらにまた本質をもって生じることと滅することがないことを意味するという。このような縁起は、最高の賢者 (munīndra) にして最高の教師 (*anuttaraśāstr) である仏によってのみ説かれる根本教説であると見なす。チャンドラキールティはまた、このような縁起説によって仏が世人をよく利益するとともに、ナーガールジュナ自身もまた自らの心に縁起に関する確実な理解を得たという。

略 語

C	Co ne edition.
C ¹	<i>Yuktiṣaṣṭikākārikā</i> . C Tsa 20b1-22b6.
C ²	<i>Akutobhayā</i> . C Tsa 29b2-99a7.
D	sDe dge edition.
D ¹	<i>Yuktiṣaṣṭikākārikā</i> . D No. 3825, Tsa 20b1-22b6.
D ²	<i>Akutobhayā</i> . D No. 3829, Tsa 29b1-99a7.
Dh	<i>Rigs pa drug [cu] pa 'i tshig le 'ur byas pa</i> , Pellicot Tib. 795, 796.
Dh ¹	<i>Akutobhayā</i> . Stein Tib. No. 637.
ed.	edited.
G	dGa' ldan manuscript.
G ¹	<i>Yuktiṣaṣṭikākārikā</i> . G Tsa 26b1-29b4.
G ²	<i>Akutobhayā</i> . G Tsa 39b3-150a6.
MA	<i>Madhyamakāvātāra</i> . 瓜生津・中沢[2012b]参照.
MMK	<i>Mūlamadhyamakakārikā</i> 葉[2011]参照.
MN	<i>Majjhima-Nikāya</i> , Pali Text Society, 1888-1925.

70	<i>Yuktiṣaṣṭikākārikā</i> の帰敬偈について (劉)
N	sNar thang edition.
N ¹	<i>Yuktiṣaṣṭikākārikā</i> . N Tsa 20b1-22b4.
N ²	<i>Akutobhayā</i> . N Tsa 29a6-104b6.
om.	omitted.
P	Peking edition.
P ¹	<i>Yuktiṣaṣṭikākārikā</i> . P No. 5225, Tsa 22b3-25a7.
P ²	<i>Akutobhayā</i> . P No. 5229, Tsa 34a2-114a8.
PsP	<i>Prasannapadā</i> . La Vallée Poussin [1903-1913] 参照.
RV	<i>Ratnāvalī</i> . Hahn [1982] 参照.
SS	<i>Śūnyatāsaptati</i> .
VV	<i>Viṅraḥavyāvartanī</i> .
YS	<i>Yuktiṣaṣṭikākārikā</i> . 李・葉 [2014] 参照.
YSV	<i>Yuktiṣaṣṭikāvṛtti</i> . P No. 5265, Ya 1a1-33b3; N Ya 1b1-33b1; D No. 3864, Ya 1b1-30b6; C Ya 1a1-29b1; G Ya 1b1-40b4. 李・葉 [2014] 参照.
YSVtr	Scherer-Schaub [1991].

参考文献

瓜生津 隆真

[1985] 『ナーガールジュナ研究』, 東京: 春秋社。

瓜生津 隆真・中沢 中

[2012a] 『全訳チャンドラキールティ入中論』, 浦安: 起心書房。

[2012b] 『全訳チャンドラキールティ入中論』, 浦安: 起心書房. 底本チベ
ット訳校訂テキスト UPL: <http://kishin-syobo.com/>, 2021年2月20
日にアクセス) .

上田 昇

[1994] 『チャンドラキールティ著『四百論注』第一～八章和訳』, 東京: 山
喜房佛書林.

王 楠

[2021] 『廻諍論』 *Vigrahavyāvartanī* の偈頌数に関して』 『印度學佛教學研究』 69(2), 895-892.

桂 紹隆・五島 清隆

[2016] 『龍樹『根本中頌』を読む』, 東京: 春秋社.

岸根 敏幸

[2001] 『チャンドラキールティの中観思想』, 東京: 大東出版社.

北畠 利親

[1958] 「龍樹五部論の相互の地位」 『印度學佛教學研究』 7(1), 172-173.

三枝 充恵

[1982] 「龍樹の帰敬偈について—帰敬偈成立史考—」 『仏教教理の研究: 田村芳朗博士還暦記念論集』, 東京: 春秋社, 67-80 頁.

津田 明雅

[2019] 『ナーガールジュナの讃歌—諸著作の真偽性とあわせて—』, 東京: 起心書房.

新作 慶明

[2020] 「チャンドラキールティにおける二種の真実 (tattva) —此縁性・唯此縁性との関係において—」 『印度學佛教學研究』 68(2), 978-973.

山口 益

[1924] 「龍樹論師の七十空性偈」 『佛教研究』 5(1), 17-64.

米澤 嘉康

[1992] 『『廻諍論』の中観論書としての位置付け』『大正大学大学院研究論集』 16, 266-276.

葉 少勇

[2011] 『中論頌：梵藏漢合校・導読・訳注』, 上海: 中西書局.

李 学竹, 葉 少勇

[2014] 『六十如理頌：梵藏漢合校・導読・訳注』, 上海: 中西書局.

劉 暢

[2020] 『『六十頌如理論注』におけるアビダルマ教学の位置付けについて』『印度學佛教學研究』 69(1), 410-407.

渡辺 章悟

[2020] 「般若経の縁起説とその展開—龍樹『中論頌』の八不偈をめぐって—」『東洋思想文化』 7, 1-30.

Bernhard, Franz

[1965-1968] *Sanskrittexte aus den Turfanfunden, X: Udānavarga*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

de Jong, Jan Willem

[1962] “La Madhyamakāsāstratuti de Candrakīrti”. *Oriens Extremus* 91, 47-56.

Erb, Felix

[1997] *Śūnyatāsaptatvṛtti: Candrakīrtis Kommentar zu den „Siebzig Versen über die Leerheit“ des Nāgārjuna [Kārikās 1-14]. Einleitung, Übersetzung, textkritische Ausgabe des Tibetischen und Indizes*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Hahn, Michael

[1982] *Nāgārjuna's Ratnāvalī. Volume 1: The Basic Texts. (Sanskrit, Tibetan, Chinese)*. Bohn: Indica et Tibetica Verlag.

Kumar, Bimalendra

[1993] “The Critical Edition of *Yuktiṣaṣṭika-Kārikā* of Nāgārjuna”, *The Tibet Journal*, vol. 18.3, 3-16.

La Vallée Poussin, Louis de

[1903-1913] *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna, avec la Prasannapadā commentaire de Candrakīrti*. St. Pétersbourg: Commissionnaires de l'Académie impériale des Sciences.

Lindtner, Christian

[1982] *Nagarjuniana. Studies in the Writings and Philosophy of Nāgārjuna*. Copenhagen: Institute for indisk filologi.

MacDonald, Anne

[2015] *In Clear Words The Prasannapadā, Chapter One*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Scherrer-Schaub, Cristina Anna

[1991] *Yuktiṣaṣṭikāvṛtti. Commentaire à la soixantaine sur le raisonnement ou Du vrai enseignement de la causalité par le Maître indien Candrakīrti*. Brussels: Institut Belge des Hautes Études Chinoises.

Suzuki, Kōshin

[1994] *Sanskrit Fragments and Tibetan Translation of Candrakīrti's Bodhisattvayogācāracatuṣṭakāṭikā*. Tokyo: The Sankibo Press.

Yamaguchi, Susumu

[1934] *Madhyāntavibhāgaṭīkā: Exposition Systématique du Yogācāra-vijñaptivāda*. Nagoya: Librarie Hajinkaku.

Yonezawa, Yoshiyasu

[2019] “A Textual Study of the **Lakṣaṇaṭīkā*.” PhD diss., Leiden University.
<https://openaccess.leidenuniv.nl/handle/1887/79823>

<キーワード>

ナーガールジュナ、チャンドラキールティ、『六十頌如理論』、『六十頌如理論注』、帰敬偈、縁起

Summary

Introductory Stanza of the *Yuktiṣaṣṭikākārikā*: On Candrakīrti's Commentary

LIU Chang

The present paper analyses the introductory stanza of Nāgārjuna's *Yuktiṣaṣṭikākārikā* (YS) based on the commentary of Candrakīrti, with reference also to Candrakīrti's commentary on the introductory stanza of Nāgārjuna's *Mūlamadhyamakakārikā* (MMK).

It is found that Candrakīrti demonstrates the relationships between YS, *Śūnyatāsaptati*, *Vigrahavyāvartanī*, and MMK, based on the opening passages of these works. Both YS and MMK open with the topic of dependent arising; according to Candrakīrti, they are therefore to be considered separate works. Furthermore, in his commentaries Candrakīrti argues that they each reflect Nāgārjuna's different intentions.

According to Candrakīrti's interpretations of both introductory stanzas, YS is a kind of short collection of "reasoning" (**yukti*) drawn from the Buddha's teachings; it aims to eliminate the view of existence held by Buddhists who were influenced by Abhidharmic teachings, since Nāgārjuna cognizes the importance and role of dependent arising concerning practical matters. However, the purpose of MMK is the cessation of conceptualization, since Nāgārjuna understands the method (*nīti*) of the *prajñāpāramitā* or "perfection of wisdom". On the other hand, the dependent arising expounded in YS is focused on the meaning of "without any objective support" (*nirālamba*), as well as free from "arising", "cessation", "existence", and "non-existence", while that in MMK is centered on the so-called "eight negations".

Further, Candrakīrti presents a series of four reasons for Nāgārjuna's

homage to the Buddha, and explains the dependent arising maintained by him, i.e., being interdependent, also non-arising and non-cessation. For Candrakīrti, this is the fundamental teaching, and can only be expounded by the Buddha. It is nothing other than teaching this dependent arising that qualifies the Buddha as the “best sage” (*munīndra*) and “best teacher” (**anuttarasāstrī*). Moreover, it is by this very theory of dependent arising that the Buddha benefits sentient beings, on the basis of which Nāgārjuna determines his understanding of dependent arising.

*Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*